

荻生徂徠における王世貞文藝思想の受容

薛, 欣欣
上海交通大学人文学院 : 博士研究生

<https://doi.org/10.15017/2202970>

出版情報 : 中国文学論集. 47, pp.88-96, 2018-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

荻生徂徠における王世貞文藝思想の受容

薛 欣 欣

はじめに

明代嘉靖・隆慶年間、李攀龍・王世貞を指導者とした文学復古運動が流行したが、特に王世貞の影響力が大きいと思われる。百年余り後の江戸文壇では、荻生徂徠を領袖として、李・王の文芸思想を吸収すると共に、「古文辞学」が唱えられた。徂徠の創始した護園学派は、江戸中期以降、文学界・思想界に大きな変革を与えたと思われる。本稿では、この日中の文芸活動にはどのような繋がりがあるのか、また、王世貞の文芸理論に対する、荻生徂徠の態度についても併せて考えてみたい。

荻生徂徠（一六六六―一七二八）は、名は双松、字は茂卿、江戸中期の儒学家・思想家、古文辞学派の領袖である。はじめ朱子学を学んだが、李・王の文学復古運動から啓発を受け、朱子学に基づいた古典解釈方法を批判し、ついに「古文辞学」を中心として新たな漢文解釈論を確立した。徳川幕府に仕え、太宰春台や服部南郭など多くの門人を育てた。著書は極めて多く、『辯道』『辯名』『護園隨筆』の外、詩文集として『徂徠集』十巻などがある。

王世貞（一五二六―一五九〇）は、字は元美、号は鳳洲、又弇州、江蘇太倉の人。祖先は東晋時代の有力貴族琅琊王氏である。嘉靖二十六年（一五四七）の進士で、刑部主事、青州兵備使、浙江左参政等官職を歴任した。李攀龍と共に、李・王と併称され、復古派前期の李夢陽・何景明を中心とした「前七子」に対し、復古派後期「後七子」の主権者として、文壇で活躍したことが知られている。『明史』巻一百七十五に伝がある。著作は『弇州山人四部

稿』一百七十四卷、『續稿』二百七卷の外、『弁山堂別集』『弁州史料』等の史学書や、『王氏書畫苑』等美術の著作もある。「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」という文学観を提唱し、その文学と史学思想は中国本土の明清文壇に止まらず、朝鮮半島にも伝わっている。

一 荻生徂徠における王世貞の著作との出会い

江戸中期に活躍した荻生徂徠と王世貞の作品との出会いを論ずる前に、江戸初期における王世貞の著作の受容状況を紹介しておこう。『林羅山書目』¹⁾によれば、王世貞の文集は遅くとも慶長九年(一六〇四)までには日本に伝えられていた。即ち、王世貞が亡くなったわずか数年後には、すでに江戸文人たちは王世貞のことは知っていたのである。当時の文化環境をみると、学問の中心は徐々に仏学から儒学へと転向しており、これに伴い、蔵書家と蔵書の重点も変化していった。橋口侯之介氏はこの変化を、「江戸時代になると、大名家、儒家に書物収集の中心が移ると、内容も漢籍、歴史、古典文学といった学術書に重心が移動する。」²⁾と指摘している。王世貞の著書は日本に伝播した後、まず儒学者たちから評価を受けたと思われる。当時の儒学者藤原惺窩や林羅山は王世貞の作品を好み、多く引用しているが、大きな流行とはならなかった。その後荻生徂徠は王世貞の著書を破産した蔵書家から偶然手に入れた。『護園雑話』の中で、徂徠の門人たちは、「尤も其の購はれたるは徂翁三十九か四十歳の時の由、子廸が物語なり。それ故徂翁殊に書籍に富まれたり。其中に李・王が集めありて古文辞を修せられしことそれよりなりとぞ。」と述べている。具体的な書目は、藍弘岳氏の論文中で、「徂徠の蔵書内容を教えてくれる『護園蔵書目録』³⁾は、『觚不觚録』『李空同集』『李滄溟集』『滄溟文選孤白』『四部稿』『唐詩選』『尺牘清裁』『七才子詩』『世説新語補』『弁州史料』『七名公尺牘』などの明代古文辞派関係の書籍が収蔵されている。」⁴⁾と紹介されている。文学と史学分野を得意とする王世貞の著作が著録されている状況から見れば、すでに徂徠が王世貞関連の著作に幅広く触れていたと推測できよう。また、徂徠にとって、定期的に最も近い著名人は李攀龍と王世貞しかない。その広く深い思想は、徂徠にとって文学的視点を取り込むという好影響を与えたとと言えるだろう。それまでの徂徠の学問的関心

と比較すると、その出会いは徂徠個人のみならず、江戸文壇にとってある程度の転換点になったとも言えそうである。

しかし、李・王の作品は明清時代の文人たちでさえ難解であり、ましてや日本人の徂徠にとっては、読解が困難であつたろうことは想像に難くない。荻生徂徠の弟子であつた宇佐美瀧水によれば、「なかに李于鱗・王元美の二家の集あり、艱澁にして読むべからず、先生これを奇とし、研究すること歴年、始めて古文辞あるを知り、遂にこれを以て門人に訓ふと云ふ。」⁵⁾徂徠と李・王の著作の出会いから、成熟した「古文辞学」の理論をうち立てるまでには数年を要し、李・王の文学思想を消化する一方で、徂徠の慎重な態度も見ることが出来る。徂徠の場合も、李・王の著作を研究する過程には、儒学を主とした過去の伝統的学問に対する反省と個人的な思想形成とがともに含まれていたのは間違いないはずである。

荻生徂徠が触れた王世貞の著作は、当初から王世貞一人の書ではなく、常に李攀龍の著作もともにあつたと言われている。確かに文学復古という点では、王世貞と李攀龍には共通点が多く、一貫して復古運動を代表する人物だと認められてきた。荻生徂徠の年譜を見ると、四十歳以後の文学活動は、李・王と深い関わりを持っている（次頁表1）。しかし李攀龍より年少の王世貞は、その名声も才能も李攀龍の陰に隠れた存在であり、徂徠にはそれほど明確に意識されなかつたと推測される。

二 李攀龍・王世貞の古文辞学の受容

古文辞学派の文学論について、李・王は一对の存在として、荻生徂徠に多くの示唆を与えた。徂徠はまず彼らを文学者として肯定し、文学創作の手法を賞賛し、「辞」を尊んだことを最大の成果とした。

「而して其の尤も李王を推す者は、辞を尊べばなり。然りと雖も、不佞の二公を推す所以の者は、特だ此れのみならず。」⁶⁾李・王文学理論の中に価値を見出した徂徠は、文学の分野に関心を持っただけでなく、文学を手掛かりとして、より深く思考を追求した。ここに徂徠と李・王の違いがあると思われる。

表1 荻生徂徠の年譜に見る李・王との関係

西暦	年号	年齢	主な出来事
一七〇四	宝永元年	39	李攀龍・王世貞の古文辞を知る
一七〇九	宝永六年	44	『護園隨筆』の編輯がはじまる
一七一五	正徳五年	50	『護園隨筆』五巻刊行
一七一六	享保元年	51	李・王の説より古文辞を唱える
一七一七	享保二年	52	『唐後詩』草定
一七二〇	享保五年	55	『唐後詩』刊行
一七二二	享保七年	57	『四家稿』草定
一七二三	享保八年	58	『絶句解』、『絶句解拾遺』、『古文矩』草定
一七二四	享保九年	59	服部南郭『李于鱗唐詩選』刊行

いが明確に存在していると思われる。徂徠も李・王に対し、その史学的才能は、ある程度認めることが出来たが、本質的に徂徠を文学者とは言えないだろう。徂徠はもともと儒学中心の江戸時代の人物であり、文学者というよりは、むしろ哲学者あるいは思想家と評する方が適切であろう。では、文学への視点は徂徠が儒学の理想へと進む過程において、有益な情報や新たな考え方を提供したにすぎないのだろうか。吉川幸次郎は著書『元明詩概説』の中で、荻生徂徠が李・王を超えた点として、次のような見解を示した。「徂徠はそれを哲学研究の方法に応用し、古代中国人とおなじ言語生活に入ることによって、『論語』その他の説く哲学を、本来のままに把握しようと、企図した。」^⑧ 則ち、李・王の成果は文学の分野に集中しているが、徂徠はそれを活用して、哲学の領域に応用したのである。

李攀龍と王世貞の文芸論を認めた上で、徂徠の弟子たちは李・王の詩文作品を基範として、さまざまな選集・合集を編纂した(次頁表2)。享保五年(一七二〇)から十九年までに、詩歌を中心とした『唐後詩』『絶句解』『絶句

徂徠は幼い時期に林鷺峰、林鳳岡に学んだことがある。少年時代より漢籍・仏典などを十年以上にわたり独学し、儒学に関する經典に精通するに至った。長い歳月をかけて蓄えた漢文や儒学の特色が、のちの徂徠学説の成立において、重要な基盤となったと思われる。徂徠は李・王の文学理論を改変するにあたり、自ら六経を重んじる観点を強調し、「祇だ李・王は心良史に在りて、六経に及ぶに違あらず、不佞は則ち諸を六経に用いること異有り^⑨と為すのみ。」と述べている。しかし徂徠は李・王の復古文学思想に比べて異なる点も述べている。そもそも、徂徠と李・王の間には立場の違い。

表2 荻生徂徠と門人たちが編纂した古文辞派の著作

西暦	年号	書名	編纂者
一七二〇	享保五年	『唐後詩』	荻生徂徠 選定 石川之清、山井昆命、根本武夷 輯校
一七三二	享保十七年	『絶句解』	荻生徂徠 選定、荻生道濟 校訂 宇佐美瀧水 再校
一七三四	享保十九年	『絶句解拾遺』	荻生徂徠 選定、宇佐美瀧水 校訂
一七六一	宝暦十一年	『四家雋』	荻生徂徠 選定 太宰春台、服部南郭、宇佐美瀧水 校訂
一七六四	明和元年	『古文矩』	荻生徂徠 選定、宇佐美瀧水 校訂

び『絶句解拾遺』は、さらに特別で絶句に限定し、主に李攀龍と王世貞の作品を収録した選集である。これに続き、韓愈・柳宗元・李攀龍と王世貞の文章を模範とし、漢文の書き方を学ぶ『四家雋』が編纂されたが、あえて李・王と唐代の古文名家を並列しており、李・王の兩名が徂徠にとって極めて高い地位を占めていたことが推測できる。明和元年（一七六四）に完成した『古文矩』には李攀龍の六篇の文章が記録されている。三種の詩歌選集と二種の文章選集より総合的に考えると、最初の「七子」から李・王二人を中心とする過程は、徂徠の認識の変化をまさに示しているのではないだろうか。

三 王世貞の古文辞学の受容

前節で徂徠が李攀龍と王世貞から受けた啓発について述べたが、本節では王世貞を中心として、徂徠に与えた影響について述べておきたい。李攀龍と王世貞は共に「後七子」の領袖と認められたが、二人の個人的な風格の違いは極めて明らかである。確かに徂徠の文章の中には、李・王並列して話題になる場合が多い。しかし、王世貞のみ

『解拾遺』が完成している。これらの詩歌選集の収録内容や書物の特徴から、徂徠たちの編纂意図が見える可能性がある。最初に出版した『唐後詩』は、「前七子」と「後七子」の作を中心として、古楽府や律詩や絶句など十種類の体裁を含む書である。いずれも冒頭部分には、徂徠によるそれぞれの詩人に対する総論が付いており、明代「七子」に対する評価を見出すことができる点で、従来貴重な記録だとされてきた。次に編纂した『絶句解』及

に言及するものもあると思われる。功績が詩文創作に限られる李攀龍に比べ、王世貞は『弇山堂別集』を代表とする史学、『王氏書畫苑』を代表とする芸術等の分野も得意とした点に違いがあると思われる。吉川幸次郎によれば、「典型への密着が、詩を窮屈にすることが多いのは、李攀龍とおなじである。ただ才能のひろさによって、李よりも柔軟であり、華麗である。」北地に生れた李攀龍に対し、蘇州出身の王世貞は、江南の伝統的な文化の薰陶を受け、詩文の風格が柔らかく、具体的な創作方法も多様であり、表現力も高かったと思われる。さらに地理的環境以外に、注意しなければならぬ要素がある。李攀龍と王世貞の家庭背景を比較してみよう。王世貞の先祖は東晋時代の大貴族琅琊王氏であり、王世貞の祖父も父も進士として中央の要職を務めている、特に王世貞の父王忬は、嘉靖帝に深く信頼されており、このような家族の経歴は、当時の文人の中でも匹敵する人は少なかつたであろう。家族の力に頼み、若くして進士となり早くも名声を得られ、著名な書画家の文徵明や高官の徐階とも緊密な交遊関係を持ち、視野を広げ文学的創造力を養ったと思われる。徂徠は王世貞と李攀龍の相異点について、韓愈・柳宗元に古文創作の方法を倣う李・王二人の違いを次のように指摘している。「蓋し滄溟は全く韓柳の法を用いず。弇州は之を用いざるに非ざれば、迺ち辞を修めて以て之に勝つ。唯辞をおさめて復古す。是れ二子の韓柳に異なる所以なり。」文学の復古活動の歴史的な流れから言えば、李攀龍が韓愈・柳宗元を代表とする唐代古文を否定する態度をとるのに対し、王世貞はそれほど「文必秦漢」の規則にこだわっていなかったのかもしれない。韓・柳古文の書き方を吸収した上で、修辞法を磨いて、独自の風格を確立した。換言すると李攀龍の頑な態度と比べ、王世貞は復古という文学理論を推奨する一方で、相対的な寛容さを見せたと思われる。一方で、李攀龍の没後二十年間、王世貞は唯一人の文壇のリーダーとして、高い評価を受けたこともこの文学理念と無関係ではないだろう。

江戸期における王世貞の文芸論の吸収状況について、創作の実践と理論の二つに分けて、検討してみたい。先ず、「古文辞学」を実践する江戸文人たちの古文創作について見てみよう。唐代及び明代の古文作品は高く評価され、模範として学ぶべきものであると思われる。例えば山県周南の文章全体の雰囲気弱さに対し、徂徠は王世貞の作品を推薦した。「韓柳は唯柳、李王は唯王。先秦に『左』『騷』ありては、漢に淮南、相如、曼倩、子雲、平子のみありては、最も此の疾を医す可きなり。次公請ふ寓目せよ。」¹⁾少なくとも徂徠は、古文の書き方という点におい

て、王世貞の作品を学ぶことで得るものがあると考えたのである。

徂徠が率いた「古文辞派」は、具体的な古文の習作に飽き足らず、形而上学的な理論にも目を向けていたようである。藍弘岳氏の論によれば、「王世貞の文論にはすでに、「孔子曰辞達而已矣。又曰修辞立其誠。盖辞无所不修而意则主於達」（藝苑卮言、卷一）といった「修辞」と「達意」という対概念に繋がる考え、及び「尚法」と「達意」とを対立的に捉えた論法（四部稿卷五十六、五嶽山房文稿）などが見られる。これらの考えはやはり、徂徠の文論の構築にとって重要な示唆を与えたと思われる。」と述べ、徂徠の古文辞学の方法論について、王世貞から「修辞」と「達意」の概念を借用した可能性が高いと指摘されている。創作の実践と理論を併せて考えると、いずれも王世貞の思想的影響を受けていたことは明白なのである。

四 王世貞の経学成就の発見

王世貞に関する研究は、ほぼ文学、史学を中心に展開されている。荻生徂徠は自身が経学に関心があったことから、その道を究め、李・王の経学の成果を探究したのかもしれない。徂徠も当初は、李・王が経学方面を得意とはしていないとみなし、以下のような評価を与えていた、「李王二公は没世其の力を文章之業に用いて、経術に及ぶに違あらず。」また「李夢陽・何景明・李攀龍・王世貞、是の四君子は、辞を修して古に復す。其の学、未だ以て経を明らかにするに足らずと雖も、然れば是に由りて以て往かば、何ぞ六経に有らんや。則ち亦井田王政の本と為すべきや。」との考えであった。この中の「其の学、未だ以て経を明らかにするに足らずと雖も」という文言から見れば、徂徠は王世貞一人ではなく、外の「七子」の領袖の経学の弱さをも提示している。

やがて広くその作品を読むに随い、王世貞の経学の成果も徐々に見出し、荻生徂徠は従前の見方を訂正した。「王元美謂へらく、『大学』は子思に非ざれば作る能はずと。此れ公、文章を知る。其の言当に允なり。又謂へらく、『大学』は経無く、伝無し。言ふ所は乃ち王公の学、卓見と謂ふべし。……孰れか王元美の経術其の長ずる所に非ざるを謂はんや。」これは、それ以前の研究者が注目していなかった視点であり、荻生徂徠による独自の発見だと思われる。

る。これまで王世貞に関する研究は、文学の分野への関心が強過ぎたため、それ以外の領域の成果を軽視することとなつてしまつた。徂徠の指摘を契機とすれば、必ずや全面的な研究を進めることができるであろう。

まとめ

李攀龍と王世貞を代表とする古文辞派「後七子」の著作は伝来当初、単なる文学活動と見なされていた。しかし、荻生徂徠は李・王の文芸論に大きな価値を認め、更に当時の社会状況を考慮し、江戸文壇に適した新たな理論を展開した。一様に「古文辞派」との呼称であつても、その目的は国により異なるのである。やがて徂徠の首唱以来、鎖国中でも、王世貞の著作の輸入が途絶えなかつた。十八世紀に完成した『舶載書目』の中に関連する内容を探しで見ると、王世貞についての情報の把握状況には、以前より大きな進展があつたことが見える。徂徠の宣揚と緊密な繋がりがあつたことは言うまでもない。以上、荻生徂徠における王世貞の受容について見てきた結果、次の二点を指摘することができるであろう。一点目は王世貞を「七子」の群体から分離し、個人的な文学理論と経学の成果を十分に認めたことである。特に王世貞の経学的な成果の発見は、新たな研究の道を開き、研究者たちに対し、重大な価値を与えたと思われる。二点目として、李・王の文学思想を吸収すると共に、経学を通じて、政治の方向に転換し、『太平策』『政談』等の著作で自身の政治的関心を、明らかに示したことである。徂徠と王世貞の政治的関心を比べて見れば、早年の王世貞は政治に対して非常に熱意を持ち、詩文を借りて時事を批判する作品がよく見られる。父の王忬が政治の犠牲者として亡くなった後、王世貞の政治態度は完全に変わった。長い間弇山園の中に隠居し、あえて朝廷と距離を置いていた。徂徠の経歴は全く逆である。幼年の徂徠は、父が徳川綱吉の怒りに触れたため、田舎で育てられた。成年に達した徂徠は、文学を手段として様々な政治改革を試みた。文学者として以外に、政治家としても認められた。これは恐らくただ徂徠と王世貞の違いではなく、多少なりとも日中の古文辞学派の差異を代表しているのではないだろうか。

注

- (1) 林羅山撰・京都史蹟会編纂『林羅山詩集』附二十二歳既見書目(ペリかん社、一九七九年)。
- (2) 橋口侯之介『江戸の本屋と本づくり』(平凡社、二〇〇七年) 二一四頁。
- (3) 荻生徂徠『護園雜話』『日本思想家史伝全集』十八卷(東方書院、一九二八年) 四一頁。
- (4) 藍弘岳「徳川前期における明代古文辞派の受容と荻生徂徠の『古文辞学』——李・王閔係著作の将来と荻生徂徠の詩文論の展開」(『日本漢文学研究』第三期、二松学舎大学、二〇〇八年) 五四頁。
- (5) 宇佐美瀧水撰「合刻古文矩文変序」(今中寛司・奈良本辰也編纂『荻生徂徠全集』第五卷、河出書房新社、一九七三年) 八九六頁。
- (6) 荻生徂徠「答堀景山(第一書)」(『徂徠集』、岩波書店、一九七三年) 五二九頁。
- (7) 荻生徂徠「復安澹泊(第三書)」(『徂徠集』、岩波書店、一九七三年) 五三七頁。
- (8) 吉川幸次郎「古文辞の功罪」(『元明詩概説』、岩波書店、一九六三年) 二一八〜二一九頁。
- (9) 吉川幸次郎「王世貞」(『元明詩概説』、岩波書店、一九六三年) 二〇八頁。
- (10) 荻生徂徠「雋例六則」(『四家雋』、宝曆十一年刻本) 四頁。
- (11) 荻生徂徠「与泉次公」(『徂徠集』、岩波書店、一九七三年) 五〇一頁。
- (12) 藍弘岳前掲論文、五四頁。
- (13) 荻生徂徠「答堀景山(第一書)」(『徂徠集』、岩波書店、一九七三年) 五三〇頁。
- (14) 荻生徂徠「護園六筆」(今中寛司・奈良本辰也編纂『荻生徂徠全集』第一卷、河出書房新社、一九七三年) 五四二頁。
- (15) 荻生徂徠「護園二筆」(今中寛司・奈良本辰也編纂『荻生徂徠全集』第一卷、河出書房新社、一九七三年) 五〇七頁。